

天文研究部

感謝状受賞



平成25年3月13日、課外活動において優秀な功績をあげた団体や個人を表彰する学長表彰式が、神楽坂の日本出版クラブ会館で行われた。授与されるのは、学長賞、学生部長賞、特別功労賞、功労賞、特別奨励賞、奨励賞、感謝状である。学長賞は国際的・全国的な活躍に、学生部長賞は地域的または加盟している連盟での活躍を表彰するものである。また、特別功労賞、功労賞は課外活動の発展に貢献した人、特別奨励賞、奨励賞は今後の活躍が期待される個人または団体に贈られる。そして、感謝状は優れた功績を称えるものだ。

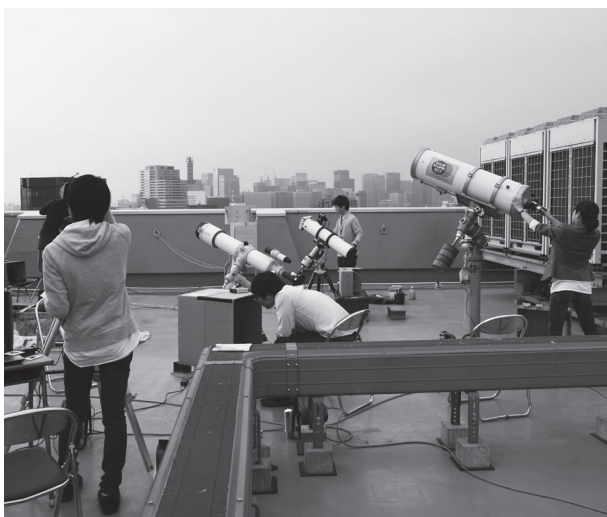
今回天文研究部が授与されたのは感謝状である。感謝状は、1年間の活動



▲ 部長の西元さんと感謝状

【金環日食の原理】
太陽の直径は月の約400倍に相当するが、地球からの太陽と月の距離の比は400対1である。つまり、理論上は地球から太陽と月がほぼ同じ大きさで観測できるといふことだ。しかし、地球と月は楕円軌道を描いているので多少の誤差が生じてしまう。月が地球から遠い場合には太陽を完全に覆い隠せないため

である。そこでは、本学が所有している膨大な記録はもちろん、かつて天文研究部だった卒業生が世界各地で収集した観察記録、フィルム、当時の新聞記事、天文暦学書、日食記念品など日食展で並んだ。様々な活動をしている天文研究部は、部員の登録者数が100人を超える大きな部活だ。普段は晴れている夜に2号館屋上で望遠鏡や天文ドームを使って観測を行い、昼間は太陽専用の望遠鏡で観測している。自分で活動の頻度を決められるようになっている。毎日来ている人もいれば時々来る人もあるそうだ。天文について詳しい人もそうでない人も一緒に楽しめるような雰囲気だ。今回取材をさせていただいた天文研究部部長の西元初夢さんは「感謝状を頂いたその名に恥じないようにこれからも頑張っていきたい」と言う。天体観測は年中することができ、肉眼で観測できるものもある。今年の11月、夕方や明け方に地平線近くで彗星を観測できるのでは非見てほしい。



▲ 金環日食を観測している様子

災害対策

平成23年3月11日、震度7の大地震が突如東北地方を襲った。この地震による影響で大規模な津波が発生し、更に被害が拡大した。死者1万5千人超、行方不明者2千600人超のこれまでに経験した事のない災害となった。世間では地震対策への関心が高まっているが、本学はどのような対策がなされているのだろうか。今年完成したばかりの葛飾キャンパスは、地下50〜60mにある固い支持盤にまで杭を打ち込み校舎を支えている。そのため、震度7の地震が来ても倒壊する事はない。さらに葛飾区と協力して震災時に校舎やグラウンドを避難所として利用する計画を進めている。これにより3日分の水や毛布

が区から支給される事になり、既に備品を収容しておく倉庫は確保出来ており、また神楽坂キャンパスも改修の際に耐震補強工事を行っている。キャンパス内で最も高い建物である1号館は免震構造になっている。倒壊する心配はないそうだ。災害時の備品は既に分散して保管されており、4号館(若宮館)や6号館1階の駐車場の奥に保管してある。実際このような備品は東日本大震災の際、帰宅困難となった学生に貸し出した。なお、神楽坂キャンパスは新宿区と締結して、震災時の避難場所となっている。東日本大震災は各地に被害をもたらしたが、またいつどこでこのような

Advertisement for TUS PRESS. Text: 広告を掲載してみませんか? TUS PRESS logo. 私たち、東京理科大学新聞会は広告を掲載してくれる団体を募集しています。詳しい情報を知りたい方は以下までご連絡ください。東京理科大学新聞会 E-mail: tuspress@gmail.com HP: http://tuspress.jp

総合研究機構

危機管理と災害対策

今回お話を伺ったのは、東京理科大学総合研究機構危機管理・安全科学技術研究部門の平塚三好教授だ。教授は災害や感染症、犯罪など様々な問題に対する「危機管理」を専門に研究している。地震関連においては、建物やインフラ関連の劣化や寿命について考え、適切な改修・管理について考えるリスク管理や、災害発生後の職員対応や生産調整など、事業継続について考えるBCP・BCMなどの研究が行われている。実際に、これらの研究が功を奏し、東日本大震災の際には早期に災害復旧を果たせた企業も多かったという。また、平成23年5月12日には被災地の現地調査報告会を行うなど、非常に素早い対応がとられた。我々が災害に向き合っていく上で大切なことは何なのかを伺った。教授曰く、「いつ災害が発生しても対処できるように心構え、そして物資の備蓄や救護技術の取得」だという。日本は世界の年間地震発生件数の実に18%を占め、常に災害の危険と隣り合わせであり、「いつ災害が起きても大丈夫」という心構えが欠かせない。

Advertisement for Professor Tomihiro Hirakata. Text: さらに教授は「悲観的になるのではなく、常に前向きに考えてほしい」とも言った。震災発生時は春休み期間中で校内に生徒はほとんどいなかったものの、水道橋の小石川公園が最終避難場所であることを知らない人が多く、一次避難場所の若宮公園が一杯になってしまった。故に平塚教授の研究室のドアには緊急時の避難場所を掲示しているのだという。また、研究室にはお茶の入った段ボールが数箱置かれ、教授自身も救急セットなどを入れたバックパックを持ち歩いているそうだ。尊い人命の犠牲を無駄にしないためにも、消防署等で救命講習を受ける等、自分だけでなく他人こそ助けられるように、救護がいつでもできる備えもしてほしいと言った。教授は震災発生後、被災地に入り放射線マップの作成などにあたったが、その過程で被災地の惨状を多く目の当たりにしたという。教授の研究室には、放射線量の計算に使ったホワイトボードが当時のまま残され、経験をどう活かす、そして同じ惨禍を繰り返さないために、これからの災害にどのよう備えるかが非常に重要になるだろう。 取材をさせていただいた平塚三好教授